
IS **インフィニット・ストラトス** ~折れた運命の剣の真の戦い~

パクロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 折れた運命の剣の真の戦い

【Nコード】

N4547Y

【作者名】

パクロス

【あらすじ】

C・E73、月面での最終決戦にて敗れたシン・アスカ。敗れた先に訪れたISと呼ばれる兵器が存在する世界でシンは何を思い、何の為に戦うか。その答えが見つかった時、シンの新たな覚醒が始まる……！！ガンダムSEED DESTINYとIS>インフィニット・ストラトス<のクロスオーバー、ここに始動！！

プロローグ（前書き）

始めまして。パクロスと申します。今回初投稿で書いてみました。連載続けられるよう頑張ります。

まずこの作品を読む前に注意事項（プラスその他）を書いておきます。

- ・この作品はIS>インフィニット・ストラトス<と機動戦士ガンダムSEED DESTINYクロスオーバーです。
- ・主人公はシンです。ちなみに一夏もそれなりに活躍します。
- ・ヒロインは鈴です。
- ・と言いつつ作者はバリバリのシャルロット党です。うっかりするとDESTINYの主人公入れ替わり劇よろしくヒロイン入れ替わり劇が発生する危険性があります。
- ・DESTINYの設定でオリジナル設定が多数出ます（これ重要）。

2

以上のものが大丈夫な方はどうぞ宜しくお願いします。

ではございぞ。

11/21 改稿しました。

プロローグ

これは折れた一振りの運命の名を冠した剣で戦い続けた少年の新たな戦いである。

C・E・73月面、ここで一つの大きな戦いが繰り広げられ、そして終わりを迎えようとしていた……………。

月面にて二体の巨人が壮絶な戦いを繰り広げていた。一体は白灰色に胸を青に染め、その背に巨大な深紅の翼を背負った巨人、MSGMF-X42S>デステイニー<、片や全身を紫の混ざった赤に染めた巨人、ZGMF-X19A>インフィニット・ジャステイス<、各々が剣を構え、交錯する度にその剣が交えていった。

「もう止めるんだ！シン！」

ジャステイスのパイロット、アスラン・ザラがデステイニーに向け叫ぶ。

「何をっ！」

それにデステイニーのパイロットであるシン・アス力が応じる。

「お前は一体なにを守ってるつもりだ！？後ろにあるものをよく見る！」

アスランの言う後ろーそこには一度引き金を引けば、多くの死を生み出す兵器、レクイエムがあった。

「あれは人でも国でも無い！従わない者を焼き尽くすための兵器なんだぞ。」

「黙れ！！この裏切り者がっ！！」

アスランが続けようとした言葉はしかし、シンによって遮られた。

「世界はもう変わらなきゃいけないんだ……だからオーブは……撃たなきゃいけないんだ！！」
「な……」

その言葉にアスランは次のレクイエムの目標がオーブだという確証を得た。

「戦争ばかりで……人の命を弄ぶ奴がいて……！
こんな世界はもう終わらせるべきなんだよ！」

そのためにオーブを滅ぼす気か！?!?
アスランは激昂した。

「ふざけるな！！そのためにオーブの国民は犠牲になれと！？お前が欲しかったのは本当にそんな『力』か!?!」

それはシンにとって、守るために力を得ようとしたシンにとって、絶望の言葉であった。そのシンの独白に、アスランは呆然とし、それが隙となった。

次の瞬間、ジャステイスの右腕は上腕からアロングイトによって切り裂かれた。

「できるようになったのはこんなことばかりだ…っ」

シンの独白は続く。その言葉はアスランに鋭く突き刺さる。

「けど…．．．．．議長とレイは戦争のない世界を作るために．．．．．俺の力が役に立つって言うてくれたんだ．．．．．!」

一旦ジャステイスから離れ距離をとる。そしてデステイニーは再びパルマ・フィオキーナを放とうとする。

「この力で全てを終わらせて．．．．．その先に平和があるなら俺は．．．．．!」

その言葉と共にシンはデステイニーの右腕のパルマ・フィオキーナでジャステイスに襲いかかろうとする。

「諦めるな!」

しかしそれはジャステイスがカウンターで放った脚部ビームブレイドによって返されてしまった。同時にデステイニーの右腕も切り飛ばされる。

「そんな風に力を使ってしまったら．．．．お前は永遠に力の呪縛から逃れなくなるんだぞ!!」

アスランはジャステイスに右腰に残ったビームサーベルを抜き放ち、それを左手に逆手で持たせる。

対するデステイニーも残った左腕の palma・フィオキーナにエネルギーを込める。両者の間に幾何かの静寂が漂う。そして．．．．

ドンッ!!

デステイニーとジャステイス、二機が一齐にスラスターを全開にし、一気に接近する。

「アアアアスラアアアンッ!!!!!!」

「シイイイイイインッ!!!!!!」

一瞬にして両者の機影が交錯し、離れていく。その戦いの勝敗は．．．．

ドゴオオオオオオ!!

「ぐあああああああ!!!」

シンのデステイニーであった。残った左腕と右脚を切り裂かれ、さらにその時生じた爆発によって背中の中まで翼までもがれたデステイニーはそのまま月面に墜ちてゆく。

それを見るアスランのジャスティスも無傷ではなかった。左腕は辛うじて無事なものマニピュレーターは限界を超えた負荷でマトモに動きそうになく、背部のリフターファトウム01も左翼側のエンジンが破壊されている。

だがアスランの心を占めていたのはシンに対する後悔の念であった。

「シン……………」

「できるようになったのはこんなことばかりだ……………」

その言葉がアスランを苦しめる。

「もっとちゃんと話しておけば良かった」

しかしいつまでもシンのことを気にしてはられない。まだレクイエムを止めていない。早く止めなければ……………!

そこでレーダーに新たな機影が現れた。

「!フラガ少佐!」

駆けつけたのはムウ・ラ・フラガのアカツキであった。

『アスラン！無事か！！』

「はい、何とか。それより早くレクイエムを！！」

『わーってるよ。プレゼントも持ってきてやったんだ、早いとこ潰すぞ！』

そう言い、ムウはアカツキが持ってきたプレゼントー新しいファトウム01ーをアスランの元へ飛ばす。素早く新しいリフターに換装したジャステイスは推力を全開にし、アカツキと共にレクイエムへ向けて飛んでいった。

.....俺は.....負けたのか.....
.....。

月面に叩きつけられたときの衝撃のせい、意識が朦朧とする中、シンは何度もその事実を心の中で繰り返していた。コックピットのサブモニターを見て、デスティニーのコンディションを確かめてみる。

ー両腕、右脚部破損、背面メインスラスター損傷、飛行、戦闘続行不可能ー

いつまでもなくまともに動ける状態ではない。しかし今のシンにはどうでもいいことだった。

負けた。

このことだけがシンの心を占めていた。守るために、そして戦争を終わらせるためにここまで戦って力を得たのに。結局負けてしまった。

この後どうなるか。アスラン達に捕らえられ、戦犯として裁判にかけられ、死刑台にでも送られるのだろうか。

みんなは大丈夫だろうか。ヨウラン、ヴィーノ、マツトのおっさん、副長や艦長などのミネルバークルーはアークエンジェルと交戦してたけど大丈夫だろうか。ルナは無事に生きているだろうか。そして……

レイはフリーダムに勝っただろうか。

そのような考えが何度も浮かぶが、すぐに消え去っていく。死ぬかもしれないということにも今のシンにはどうでもいいことだった。負けた。

負けてしまった。

これまで自分が信じてきたもの、思い、それが全て負けてしまった。壊れてしまった。

俺にはもう何も残っていない。

そんなことを考えながら狭いデステイニーのコックピットの中でうずくまっていた。

どれだけ時間が経ったのだろうか。シンはふとそんなことを考え

た。そしてまたきえさるうとした。そのとき

ドオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!

とてつもない爆発音が走った。

「っ!?!」

その音にシンの意識は急速に覚醒していった。何が起きたのか、あわててデステイニーの生きてるリーダーや通信機器を使って情報を集めようとした。そのとき

ゾクッ!!!!!!!!!!

「っ!?!」

全身に悪寒が走る。それと共に今まで感じたことのないものを感じた。言葉にできない。ただこれだけはわかった。

ここから先に感じるもの、あれはここからなくさなければ。

シンは無我夢中でレバーを押す。しかし先ほど確認したとおり、今のデステイニーに戦闘はおろか動くこともまともにできる状態ではない。それでもシンはやめようとしなない。

「っ!!.....動けよ、デステイニー.....!!.....
.....動いてくれ.....!!!」

何度もレバーを押す。

「何でか知らないけど.....あれは.....
ここにあつてはいけない.....ここにあつたら.....
.....殺してしまう.....みんなを.....
.....世界を!!!」

その言葉と共にシンの瞳に涙があふれていく。

「もういやなんだ.....誰かが死んでいくのは.....
もういやなんだ.....誰かが悲しむのは.....。俺は
そんな世界がいやで力を得たんだ。だから動けよ!みんなを、世界
を守るために動いてくれ!!デステイニイイイイ!!!」

「力が欲しいか」

「っ!?誰だ!!!」

急に聞こえた言葉。シンはあわてた。通信機器は故障している。
「一体どこから.....」

「力が欲しいか」

―月面、レクイエム内部―

そこでは、誰も予想してもない事態が発生していた。いや、あの程度予測はしていた。レクイエムの防衛システムが発射口に張られたビームシールドだけでないことぐらい、他にも敵がいることぐらい予測していた。その為にムウは予備のリフターを用意し、出来るだけベストコンディションでレクイエム破壊に望もうとしていたのだ。しかし……………

ギヤオオオオオオオオオオ!!!

『くっ!?!』

『フラガ少佐!!!』

『大丈夫だ!しかしこいつら……………!』

「MS……………なのか……………?」

彼等が今相手にしているのは連合製ともザフトとも言えないデザインの、それどころか機械なのかどうかも怪しい異形の存在であった。全体のフォルムを人間や鳥、50mはあるだろう巨体、爬虫類等の生物を掛け合わせたカメラ的デザイン、全身を覆う有機的な装甲より甲殻のようなもの、そして頭部に当たる部位にある口や目玉どう見てもMSとは言い難い。そのような姿の異形がアスランとムウの前に圧倒的な威圧感を出して立ちはだかっていた。

そして……………

ギヤオオオオオオオオオ!!!

再びその異形が雄叫びを挙げるや否や、アスランとムウの機体へ向けてMSなど跡形もなく消し去るかとも思える極太のビームのようなものを撃ちだした。

『うお!?!』

「くっ!?!」

迫り来るビームをふせげないと判断するや、回避すること凌ぐ。

『ちい!もう時間がないってのに!!!』

「どうすれば……!!!!フラガ少佐!!!!」

次の瞬間その異形はその大きさと驚くほどの速度でアカツキに向けて突進を仕掛けていく。

『ぐあああああああ!!!!!!』

「フラガ少佐!!!!」

慌ててアスランがアカツキの元に向かうも、今度はジャスティスに狙いを定めたようである。

「ちい!!」

軽いしたうちと同時にアスランはジャスティスの左腕に残されたシールドからビームソードを展開し、異形に襲いかかる。

ガキイイイ!!!!ガキン!!!!

何度も切りかかるも異形の表面に傷が付いた様子はまるで無い。

「お前は一体何者なんだ!何故俺達の前に立ちはだかる!!!!」

アスランは目の前の異形に問いかける。無論、相手が応じるとは思えないだろう。しかし異形はアスラン達の想像を遥かに超えるものだった。

「……………ウレ……………ウレ……………ハ、
セカイノ……………チヨウテイシャ……………」

「!? 声が!?!」

「一体これは!?!」

アスランと異形からの攻撃のダメージから回復したムウが驚く。

「……………キサマラガ……………セカイノソウ
ゾウシャナラ……………ウレウレハ……………セカイヲハカイ
スルコトデ……………セカイノチヨウテイヲトリモドス……………
……………」

「また声が!?!……………だが……………世界の破壊だと……………
……………!?!」

「ソウダー」

アスランの問いかけに異形が応える。

「世界の破壊……………一体何のことなんだ!?!」

「ホンライセカイハムデアルコトコソアルベキスガタ。ソレガイマ
デハアマタノセカイガナリタツテシマツテイル。ユエニセカイノ
ハカイヲオコナイ、アルベキスガタニスル」

「デステイニー！？シン！？」

生き残ったモニターからその機影を確認するや否や、アスランは驚いた声をあげる。

デステイニーはその身を謎の緑色の光に包まれた状態で損傷した状態はおるか、フルパワーでも有り得ない程のスピードを出しながら、異形へと突撃していった。

ガキイイイ！！！！

激しい衝突音と衝撃と共に異形からの拘束から解けたことに気がついたアスランは、残ったスラスタでその場から離脱した。

「ナ！？コレハ！？シカクシャノチカラダト！？」

再び聞こえる異形からの声、それは驚きに満ちた声だった。しかしアスランの意識はデステイニーじ向けられていた。

今のデステイニーの進行方向、あの先にあるのは……………

『よせ！ボウズ！レクイエムに突っ込むつもりか！？』

そう、デステイニーが異形と共に行こうとしてる先は今にも発射されようとしているレクイエムであった。おそらくデステイニーごと異形とレクイエムを葬り去ろうとしているのだろう。

「シン！？死ぬ気か！？」

アスランはシンに呼びかけようとするが聞こえない。
そのままデステイニーと異形は吸い込まれるようにレクイエムへと
突っ込んでいった。

「うあああああああああああ！！！！！！！」

シンは叫ぶ。彼の頭には何が正しいかという思考は存在しない。
あるのはただ、目の前にいる存在を倒す、そして世界を守るとい
うことだけであった。理屈も何もない。ただの直感。剥き出しの感情。
しかしそれが、シンの、デステイニーの力となる。

「うあああああああああああ！！！！！！！」

再び叫ぶ。同時にデステイニーを包む緑色の光の輝きも一層強くな
る。

「ナゼジヤマヲスル！？ナゼキサマガココニイル！！シカクシャ！
！！！！！！」

異形から言葉が発せられる。

「守るんだ．．．．．世界を．．．．．守るんだ．．．．．
．．．．．皆を！！！！」

そして．．．．．

「うあああああああああ！！！！！！！」

その言葉と共にアスランは受け入れた。
一人の少年がこの世界から永久に居なくなったことを。
シンが死んだことを。

「……………シン！……………」
……………この馬鹿野郎……………！馬鹿野郎！馬鹿……………野
郎……………」

この……………馬鹿野郎おおおおおおお！
……………」

こうして、シン・アスカの戦いは終わった。

だが、それは前哨戦に過ぎなかった。

ここに、あらたなる世界にて、シン・アスカの新たな戦いが始まる。

プロローグ（後書き）

どうも。パクロスです。先日家にBDレコーダーが届いてやっと録画ができるようになったパクロスです。前のアナログ対応で今まで録画できなかったんだよ……。

え、いかがでしょうか。初投稿なのと、オリジナル設定（以後オリ設定）の反応がどうなのかで、結構ビクビクしています。

オリ設定の方は後々書いてみたいなと思ってる作品で使う予定だったんですけど、試験的に組み込んでみました。反応が良ければその作品に組み込む、『ひでえw』『やめちまえ』的な反応が来ましたら、企画倒れになりますね。

という訳で感想をお願いします。悪い点もどんどん書いてください。こういう作品を書くのは初めてなんで、色々な指摘を受けて精進したいと思います。

で、本編の方ですけど、シン対アスランの戦闘描写と台詞はアニメと久織ちまき先生のコミック『THE EDGE』から拝借しました。『THE EDGE』はアスラン主人公の作品ですけど、シンサイドのキャラ達の話もしっかり書かれていて、気に入ってるガンダムこみです。これでDESTINYを作り直せー！………すいません。

今回は『新章！IS学園編！（ダイナミック作品風）』でISサイドのキャラが絡みます。次回の投稿をお楽しみに（いつになるかわからないけど）。

新たな『世界』との出会い（前書き）

何とか完成したんで投稿します。

11/21 改稿しました。

新たなる『世界』との出会い

．．．．．ここは．．．．．
俺は一体．．．．．

シン・アスカは沈んでいた意識があがってきたのを感じた。段々と意識が覚醒するのを感じながら、シンはふと自分が今どこにいるのかと思い、辺りを見回した。

そこは不思議な空間だ。周りは白く光り輝き、所々に様々な霧がかかっているというような空間。上下左右の感覚は無く、どこにもコロニーや地球、月等、見慣れたものもどこにもなかった。

そんな不可思議な空間にいるのに、不思議とシンは焦らなかつた。混乱もしていない。むしろ今までのどの時よりも落ち着いている。そして不思議なことに．．．．．安らぎすら感じる。まるで、ここが本来自分のいる場所だったような．．．．．

―目が覚めたか．．．．．

声が聞こえた。あの異形からの声では無い。

あの時、デステイニーを動かそうとした時に聞いた声だった。

「なあ．．．．．ここは一体．．．．．」

先程から考えていた疑問をその声に問いかける。あの声が聞こえたのに、相も変わらずシンは落ち着きの中にいた。

「さあな……ここは多くの世界を包括する場所……
……でも言うべきか……?」

ソレの答えは歯切れの悪いものだった。もしかしたらソレにもこの空間のことが分からないのかもしれない。或いは分かっているのだが、言葉にするのが難しいのかもしれない。

「まあ、別に気にしなくてもいいか。そろそろお前も流れ着く様だしな。」

ソレの言葉にシンは再び疑問を抱く。
流れ着く?

「ちよつと待ってくれ。流れ着くって何の話なんだ? それに一体どこに?」

しかし返ってきた答えは……

「あ? どこだかなんて知らねえよ。」

と言ったものである。シンは余りにバツサリした答えに脱力しかけた。

「知らないって、おい………」

「じゃあねえだろう。知らねえモンは知らねえんだから。」

「ま、ここに来たのは、お前に会うためだしな」

会うために？何の為に？

そのことについてシンは再度聞こうとしたが、突如シンの体は光に包まれたと同時にシンの意識は再び遠ざかり始める。

「ちっ。もう行っちまうか………おい！シン・アスカ！よく聞け！……」

ソレが舌打ちをし、まるでこの果ての無い様に思えるこの空間の隅々にまで届かんばかりの大声で叫んだ。

「戦え！！誰かに強いられてでもない、自らの意志で！運命でも、正義でも、自由でもない！己の意志で戦え！……」

そうソレが言う頃にはシンの意識は底辺へ沈もうとしていた。返す言葉は酷く儂い声だった。

「………まだ………戦うのか………俺には………」

．．．もう．．．．．守るものも無いのに．．．．．
」

そしてシンの意識が途切れ、完全に光に包まれる。やがて光が消えるとその空間にシンはいなくなつた。

ここは日本某所にある国立IS操縦者育成機関、IS学園。この世界では最強と言われるパワードスーツ、IS>インフィニット・ストラトスクのパイロットを育成、教育するために建てられた学園である。

その学園の職員室で、二人の女性がー今は休憩時間なのだろうかー茶を一服しながら雑談をしていた。

一人は黒いスーツに身を包んだ女性で、美人と言えるが、その凛とした表情や身のこなし、身に纏う気迫など、多くの人間は彼女のことを『武人』だと言うだろう。彼女の名前は織斑千冬、IS業界ではその名を知らない人間などいないと言わしめる女性だ。

もう一人の方は千冬と比べるとほんわかしたような女性である。スーツ姿の千冬と違い、こちらは黄色いワンピースを着込み、緑のシヨートカットに眼鏡が印象的である。こちらの女性は山田真耶という。

二人共、このIS学園で教師を勤めている人間である。

彼女達の話題は、最近世界を賑わせた大きなニュースへ移っていた。

「しかし驚きですよね。まさか織斑先生の弟さんがISを動かしたなんて。」

「全くだ。あいつめ。次から次へと問題を起こしおつて．．．．．

「こちら織斑。管制、一体何があつた？」

「お、織斑先生！ わ、分かりません！ 突如学園上空に熱源反応が発生したと思ったら猛スピードで墜落して……」

途中で千冬はそのやり取りが他の教師にも聞こえる様、端末をスピーカーモードにして聞いていた。

「何が落ちたか分からないのか？」

「グラウンドに落ちたようですが落下時に生じた粉塵で……！」

管制にいる担当の教師が何かを見たようだが、その声は驚きに満ちていた。

「？ 一体どうした？ 何が見えた？」

何か違和感を感じた千冬はその教師に問い詰めだした。

「えと、それは……。今そちらに映像を送ります。」

そう慌てて言い、管制から職員室にある大型モニター主に職員会議等で使用されているーにリアルタイムの映像が流れる。そこには……

「こ、これは……」

「なん、だと……」

映像を見た真耶や他の教師達は驚きの声を上げた。そこには滅多なことでは驚かない千冬も含まれる。彼女達を驚かせている映像に

は

鉄灰色の装甲

朽ち果てた四肢

輝きを失った瞳を持つ頭部

背に背負う半ばで砕けながらも巨大さを誇る翼

全長18mに及ぶ巨大なロボットが横たわっていた。

ここは俺は生きているのか?

急に浮上した意識の中、シンはふとそんなことを考えていた。

まぶたが開けるのさえ辛いほど重く感じる。

そんなまぶたの状態を無視し、シンは勢いよく目を開ける。

開いた目に最初に飛び込んだのは、真っ白な天井だった。

ほかの景色を見ようと首を動かすが、その途端

. . .

「!?!? ぐう!?!?」

凄まじい痛みが全身を走り、シンは思わず呻き声を上げる。丁度その時シンのいる部屋に人が入ってきた。

「あ！ ちょ、ちよつと大丈夫ですか!？」

入ってきた女性はシンの呻き声を聞いたらしく、すぐに駆け寄ると手首の脈を測ったり、側にある機器をいじったりしていた。

そこでほとんど覚醒しきったシンは今の自分の状態を確認する。大分酷い状態の様だ。腕には包帯が巻かれており、今は入院着を着ているがその隙間からも包帯が見えてる辺り、胴体も腕とそう変わらないなと思った。頭はどうか知らないが、頭の感触からしてそれらにも巻かれているようだ。

そこで機器―多分医療関連だろう―から女性は目を離し、ほっとした様な表情でシンに話した。

「良かった。ここに運ばれたときは死ぬんじゃないかと思いましたが、無事で良かったです。あと二週間もすれば退院なので安心して下さいね。」

完全に聞き手に回ってたシンはここはどこなのかと聞こうとしたが、起きたばかりかかすれたような声しか出ない。

「今織斑先生を呼びますね。少し待って下さい。」

そんなシンの様子に気づかなかったか、女性は一方的に話を切ると、その『織斑先生』を呼びに行ったか部屋を出てしまった。

「.....」

再び一人だけになった部屋でシンはとりあえず現状を整理、把握

しようとした。

今いるこの場所は病院だろうか。とすれば先の女性は看護師か何かで、女性が呼びに行つた『織斑先生』は自分の担当医師なのだろう。ということは……………

「死に損ねたか……………」

「やれやれ。そう言われては治療した甲斐も無いな。」

「！」

声のした方に顔を向けると、入り口に黒いスーツ姿の女性が立っていた。

「……………あんたは？」

「人の名前を聞く前に自分の名前を言つたらどうだ？」

「……………シン・アスカだ。」

有無を言わせぬその言動にムツとしながらも、今の状態では反論できようがないと思つたかシンはとりあえず名前を言つた。

「そうか。私は織斑千冬。このIS学園で教師をしている。」

その女性―織斑千冬の言うことから、ここは学園であるようだ。

しかしISなど自分の知識にそんな存在しなかった。

（何かの略称か？）

シンはそう考えISについて聞こうとしたが、その前に千冬の方から話を切り出してきた。

「さて、まずアスカ。お前は一体何者だ。何故この学園に来た。」

「え？」

「所属はどこだ。何らかの意図があつて来たのなら目的を言え。」

その後いくつ言葉を交わす内にいくつかが分かった。

まず年号が違っている。シンは今の年号はC・E・73だと言っているが、千冬は今は西暦2015年だとそれを否定した。それにシンは再び慌ててしまった。シンからすれば西暦の年号などC・E・より前の年号で未だにその年号を使う者などシンは見たことが無い。そしてそれぞれの現在に至るまでの歴史も大きく異なっている。シンのC・E・では人類は既に宇宙進出を果たし、宇宙に居住空間であるコロニーを建設、おまけにその宇宙で戦争までしているものがある。

一方の千冬は、こちらでは宇宙はある程度進んでいるもののある出来事が原因でそれもここ十年は停滞気味であり、今でも組み立て中の宇宙ステーションや人工衛星を打ち上げてるレベルだという。

余りに違う認識、そしてシンの持つ携帯端末などの技術体系の違いにデステイニーという名のMS、それらの要因から上げられる結論は……………

「まさか異世界だとか……………どこの三文小説だよ……………」

ここが異世界だと言うことに思わずシンは頭を抱えてしまう。

「全くだ。私も信じたくはないがMSの存在はこの目で見た以上否定はできません。おまけにあんなことまで起きてしまっ……………」

「あんなこと？」

「いや、気にするな。」

千冬の方もこのことに頭を悩ませてるが、こちらは受け入れが早いようだ。最もその後に行った『あんなこと』が少し気になったは、千冬は黙りを決め込んでるときだ。

「お前が異世界人というのは理解したがこれからどうする？元の世界に戻るか？そんな技術、どこにも無いが一応探してみるか？」

「……………いや、いい。元の世界に戻る気は無い。」

「……………いいのか？」

「良いも悪いも、もう向こうの世界に居場所なんてどこにも無いし、元々俺は死んだ身だ。死人は蘇るべきじゃないさ。」

それは今のシンの正直な気持ちだ。デステイニープランのためじ多くの命を奪った。今更どの面下げて戻ればいいのだから。それにレクイエムに突っ込んだ自分は恐らくMIAI戦闘中行方不明に認定されてることだろう。あの状況から無事に向こうに戻りにでもしたらそれこそホラーものである。

「……………そうか。」

千冬もシンの表情から何かを感じたが、それ以上何も言わなかった。

「ところでこの世界って一体どんな世界なんだ？それにさっきから気になってたんだけど、ISって何のことなんだ？」

少し暗くなった部屋の雰囲気を変えようと、さっきから気になっていたので疑問をシンは口にする。

「む、そうだな。ISのことについて少し説明する必要があるな。」

そう話を切り出し千冬はISについて説明を始めた。

IS-1 正式名称インフィニット・ストラトス。これ今より十年前に篠ノ之束によって発表された宇宙空間での活動を想定したマルチフォーム・スーツのことである。宇宙空間での活動を想定というが、様々な要因により兵器、そして現在ではスポーツ用飛行パワードスーツへとその姿を変えた。

その兵器としてのスペックはこの世界の頂点に存在しており、ISの前に既存の戦闘機や戦車などの兵器は鉄クズで等しいという。そのような高いスペックを持つISであるが、ただ一つしかしそれがこの世界を形成している一欠点がある。それは……………

ISは女性にしか使えない

この事実は必然的により多くのIS操縦者を揃えようという各国家群の動きに繋がり世界は女性優遇社会になり、『女尊男卑』の社会を作り出すに至ったという。最も多くの女性は男の社会的地位を認めており、それ程酷いものではないとか。

「ということだ。分かったか？」

説明を終えた千冬はシンを見つめる。

「それってホントにパワードスーツなのか？」

今までの説明を聞いてシンがまず思ったことがそれだ。明らかにスペックが異常だ。パワードスーツ自体C・Eの世界にも存在するが、それにしてもMSの登場後はメビウスなどの宇宙戦闘機同様に旧世代の遺物と化しているものだ。

しかしこのISというパワードスーツはC・Eのパワードスーツは愚か、MSに匹敵するのではないかと思える。

PIICIPATツシブ・イナーシャル・キャンセラーによる空中での浮遊・加速機能、シールドバリアーと絶対防御による強固な守り、さらには高感度センサーのハイパーセンサーなどMSには無い機能が大量に詰め込まれている。さらに恐ろしいのはそれだけの機能を3m程の大きさの中に集約しているところだろう。スペックだけならザフトの初期量産型MS『ジン』を軽く上回るのではないかと思えてきた。

「私からすればMSの方が不思議に思えるがな。」

千冬はそう言ってこの話をまとめた。そしてシンは次に気になっていたことを口にした。

「俺のデステイニーはどうなったんだ？」

千冬の話を書く限りではデステイニーもこの世界にあるようだ。

いくら元の世界に戻る気は無いとは言えデステイニーだけが唯一C・E・を結びつけるものだ。何か思うところがあるのだろう。

しかしその話題に触れると千冬は若干苦虫を潰したような表情になった。

「あー、お前のMSのデステイニーとか言うのだが……少し面倒なことになっていてな。」

「面倒なこと？ 一体何のことだよ？」

「むう、口で説明するのは難しいな。とりあえず今は体の治療に専念しろ。」

千冬はシンの体中に巻かれた包帯を見ながら、おもむろに立ち上がった。

「え？ お、おい！？ どういうことなのかもつと説明しろ！！」

余りに少ない千冬の答えに一瞬憤慨しかけるシン。しかし理不尽なことに千冬はそれを無視し部屋を出ようとする。

「お、おい！？ 待てよ！」

「お前は少し落ち着け。まず体の回復だ。それが終わったら見せてやる。」

千冬はそう言うと今度こそ部屋を出てしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

腹立たしいことこの上ないことだったが、余りに多くのこと聞いたためか、シンは再び眠気の中に巻き込まれていく。完全に眠りにつく前にシンはこれからの自分について考えた。

自分が知ってる人間など誰もいない世界。
誰も自分を知らない世界。

右も左も分からぬこの世界で俺は・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・俺は・・・・・・・・これからどうして生きればいんだろう・・・・・・・・何のために生きていけばいんだろう・・・・・・・・」

その答えを出すまえにシン意識は完全に底に沈んでいくのであった。

新たなる『世界』との出会い（後書き）

どうも。パクロスです。最近PS3の160GBのを買おうか320GBにしようか考えてるパクロスです。

今回からやっとISキャラと絡みましたが、これを書き終わるの月曜の夜に終わったんですよね。なのに気がつけば早1日。理由としては、この小説って基本Androidで書いてるんですよね。で、未だにタッチパネルに慣れずに誤字がゴロゴロといった有り様で……おまけに、修正しようと編集画面を押すと急にブラウザが強制終了してしまうという事態が毎回のよう。よりによってブラウザのウィンドウまで消えるから、修正箇所を一からやり直すと（泣）。正直誰かアドバイス頂戴よ言いたくなる状況です。暫くしたらどこかでPCを借りて修正しようと思います。

あとついでにこの小説の書き方についてですが、感想で指摘を貰い、他の作品を見て、ここではこういう書き方にすることにしました。

- ・段落の始めは一文字空ける。
 - ・台詞は一行空けてから始める。ただし台詞が連続する場合は間を空けない。
 - ・台詞で！や？などの後は一文字あける。
- と言ったところです。現在は先の状態でまだ出来ませんが、以降はそう言う形式でいこうと思います。読みづらい方がいるかもしれませんが、その辺は宜しくお願いします。

で、本文の解説に入ろうと思います。

まず序盤のアレですが、初っぱなからオリ設定でとばしています。

まだ始まったばかりで分からないところもあるので、まあ流し読みして結構です。

次にデステイニーがMSで出てきてますが、よくあるパターンのMSがISになってIS学園にやってきたというでわなく、こちらではMSの状態です。まあ次回ではまたとんでも事態になりますのであとシンっぽくない気がしないと思いますが、うちのシンはちょっと暗めがデフォルトです。このシンは感想の返信でも書いてありますが、思いつきり悩んでもらおうと思います。悩みに悩んで、自分の答えを出していくという心の成長の物語を書いてみたいと思います。その下準備で序盤はえらいシンが暗くなるのでそこるところ宜しく願います。

では、今回はIS版デステイニーとシンのISでの初戦闘というところで次回をお楽しみに。
では。

生まれ変わりし運命の剣（前書き）

今回は、皆さんお待たせしました、奴の登場です。
それと今回一万字越えたわ。うわ~~~~~！

12/6 改稿しました。

生まれ変わりし運命の剣

千冬からこの世界のことを聞いてから一週間後、シンは千冬とあの後紹介された教師の山田真耶に連れられ、IS学園内の廊下を歩いていた。

ちなみに、完治に二週間程かかると言われた全身の怪我だが、コーデイネーターの回復力の高さからか、半分の一週間で治り、周囲を驚かせることとなった。

それはともかくしばらく歩いていると、目の前に重厚そうな扉が現れた。

「着いたぞ。ここだ。」

千冬がそう言い側にあつたパネルを操作する。圧縮空気の抜ける音と共に扉は開く。

そこは、六方を金属板で覆われた広い部屋で、何かを固定するためのハンガーや天井からぶら下がるアーム、大型の工作機械やその他諸々の作業道具がある部屋である。なんとなくMSの格納庫に雰囲気が似ているとシンは思った。

「ここは？」

「ここはISの整備室だ。ここでISの整備や出力調整などを行う。」

千冬はシンの疑問に簡潔に答え、ついて来いと言うとそのまま整備室の奥に足を進める。遅れてシンもついて行き、その後ろを麻耶がパタパタと音がしそうな感じでついて行く。しばらく歩いていく内にシンはある疑問を口にする。

「なあ？ 俺のデステイニーは何処なんだ？」

MSは18mものサイズの巨大な兵器だ。対するこのIS整備室は相当広いが、MSの格納庫と比べると少々狭い。ここにあのデステイニーが入るとは思えないし、よしんば入ってもあの巨体だ。ここまで歩いてその影も見当たらないとは……………

「もう少ししたら分かる。それまで待て。それから前から言おう思っていたが……………」

そこで千冬は振り返りシンと向き合つと……………

バアアアン！！

「いいっ!?!」

凄まじい音と共にシンの頭に千冬が持っていた出席簿が直撃する。

「……………!!」

「ア、アスカ君!? 織斑先生!?!」

「目上の者には敬語を使え。愚か者。」

余りの痛みにシンは思わずその場でうずくまり、真耶は何が何やらと言った感じでオロオロする。一方そんな事態を引き起こした張本人はしれっと言う始末だ。

「だからっていきなりこれかよ!」

思わずシンは反論するが

バアアアン！！

「敬語はどうした？ 敬語は？」

「……………はい。申し訳御座いません。」

余りの痛みにシンは素直に従う他無かった。

正直アカデミーの教官の鉄拳よりずっと痛い。

そんなこんなで再び歩くと目的地にたどり着いた。

「ついたぞ。ここだ。」

千冬が言ったそこにあっただのは……………

「これって……………IS？」

一機のISであった。

「そうだ。」

「なんで俺をここに……………！！」

俺はデステイニーを見にきたんだ、と言おうとしたがそこでシンはあることに気づき、思わず続く言葉を止めてしまう。

似ているのだ。彼が共に戦ってきた愛機に。

鉄灰色のボディー。

籠手の様なパーツに覆われたマニピュレーター。

そして余りに特徴的な、鋭く伸びた一对の巨大な翼。

多少のディテールの違いはあれどそのISは

「デス、ティニー?」

MSデステイニーに酷似していた。

「どづいうことだよ！ なんでこいつは!」

予想の遙か上に行く事態にシンは思わず千冬に食ってかかるが . . .

.

バアアアン!!

あえなく千冬の出席簿アタックによって鎮圧される。

「~~~~~!!」

「落ち着け馬鹿者。まあ、そんな反応をしても仕方ないか

」。

「どづしてこのISは俺のデステイニーに似てるんですか?」

また叩かれては堪らないので、今度は言葉を改めるシン。

しかし返ってきた答えはとんでもないものだった。

「結論から言えば、このISはお前のMSに似ているんじゃない。

このISはお前のMSそのものだ。」

「……………は？」

余りに突拍子の無い答えにシンは思わず間の抜けた声を出してしまふ。

暫く間を空け、千冬が語り出す。

「あれはお前が此処に着いた時のことだ……………」

「……………これは一体……………」

目の前の光景に真耶は言葉を失う。一方の千冬は黙って目の前のある巨大ロボットーMSデステイニーを見つめていた。

職員室でデステイニーの機影を確認した後、千冬は直ちにIS教師部隊を編成。急いでデステイニーが墜落した現場ーIS学園グラウンドに駆けつけた。

「一体あのロボットは……………？ 誰が作ったんでしょう？」

「さあな。しかしこのIS学園にわざわざ落ちてきたんだ。祿なことでは無いだらう。」

そのまま全く次から次へと、と溜め息をつきながら千冬はブツブツと呟いた。そんな千冬を見て真耶は何も言えなかった。

「とりあえず、これからどうしましょうか？」

「そつだな．．．．．今は現状のまま警戒態勢に。まずは相手の反応を見てみる。」

千冬は教師達に指示を出し、通信機に手を伸ばす。周波数をオーブンチャンネルに合わせ、向こうにも聞こえるようにする。

「聞こえるか！ こちらはIS学園教師部隊だ！ 直ちに応答せよ！」

そこで一旦通信を切り、相手からの応答を待つが、なかなか来ない。

「応答がありませんね。」

「そもそもあれには人が乗ってるんでしょうか？」

「分からない。熱源反応で人は乗ってる様だが．．．．．。」

今まで見たことが無いモノのため、千冬達がこの後の対応に窮する。しかし その時間は長くは無かった。

「．．．．．！ お、織斑先生！！ あれを！！！」

「ん？．．．．．！？」

デステイニーが一番近いところで待機していた教師が驚きの声を上げ、遅れて千冬や他の教師も同様の反応を示す。

彼女の目の前にあるMSデステイニー。その機体の腹部の装甲が展開し、空洞が出来る。そこから一人の人間が這い出てきた。ライダースーツとヘルメットで包まれたその体は、体格から判断するにおそらく男のものだろう。その男はヨロヨロと頭を此方に向け、震える手を此方に伸ばそうとする。しかし体に限界が来たのだろう。

力尽きたようにその空洞ーおそらくコックピットだろうーから転げ落ちていく。

「!? お、おい!! しっかりしろ!」

「お、織斑先生!!」

倒れた姿を見た千冬は周りの声を無視し、クレーターを滑り降り男の側へ寄っていった。

男の元に辿り着いた千冬は男の容体を確かめようとパイザーがひび割れたヘルメットを取る。外れにくい様になっていた様だが、衝撃でどこか壊れたのだろう、直ぐに外れた。

ヘルメットの中の人物は思った通り男だった。白い肌、黒い髪の毛の主で年はおそらく十代半ばだろう。パイザーが割れた為か、額から血が流れていた。この様子では体中がボロボロだろう。

そこまで思考が及んだところでラファール・リヴァイブに乗った真耶が到着した。

「お、織斑先生ー! 大丈夫ですか!？」

「山田先生。私は大丈夫だがこいつはな」

「え? って大変!! 直ぐに医療班を呼び
.!」

真耶がそこまで言ったところで、デステイニーに新たな異変が起き始めていた。

.
.グオングオオオオオン

突如鳴り響くエンジンの駆動音と共にデステイニーが動き出す。

「なあ!？」

「う、動いてる!？」

千冬と真耶が驚きの声を上げるが、デステイニーはそれを無視し動き出そうとする。その四肢はすでに失われ、動くといっても身によじらす程度であるが、デステイニーはそれでも動く。そして頭部のフェイスパーツが此方を向くと同時にその顔の双眼が緑色に光りだす。そして……………

――機体コンディション確認、機体ダメージデッドゾーン――

デステイニーのコックピットのモニターに電子音と共に文字の羅列が走る。

――機体保護プログラム発動、付近の機体とのシンクロ一体化を開始――

キイイイイイイイイン!!!!

文字の羅列が一旦終了すると同時にデステイニーから先ほどとは違う音が流れる。

「う、これは……………!?!?」

「一体何が始まるんだ!?!?」

千冬と真耶は驚きの声を上げる。そして新たなる動きが起きた。突如デステイニーの胸部装甲がパージされ、そこにはクリスタル状の不思議な光を放つナニカがあった。

「ハイパーデュートリオン出力不足を確認、周辺のクオリファイア因子を収束、エネルギー補填に使用――」

周囲の地面から幾何学的なラインがデステイニーへと走っていく。そこにまるでエネルギーが送られていく様に緑色の光がラインを通ってデステイニーに流れていく。

「クオリファイア因子の一定値突破を確認……………」

「クオリファイア因子増幅炉、始動――」

それを最後にクリスタルパーツが直視できない程の光を放ち、デステイニーを包む。その影響は真耶のラファール・リヴァイブにも及んでいた。

「え！？ 何！？ 機体が……………!?!?」

「！ 山田先生!?!」

「機体が引き寄せられて……………きゃあああ!?!」

必死でラファール・リヴァイブをコントロールするもそれは無駄なあがきでしかなく、あえなく真耶はラファール・リヴァイブごと光の中の吸い込まれてしまう。

「山田先生!?!」

ISは女性にしか使えない
この大前提があるにも関わらず、何故千冬はシンに乗れと言っ
るのか？

「そうだがモノには例外があると言っものだ。」

そう言い、千冬はシンに丸めた紙を渡した。広げてみるとそれは
新聞だった。その一面にの見出しには

「世界で唯一ISを使える男、織斑一夏」

と書かれていた。

「世界で唯一ISを使える．．．．それにこの織斑一夏って．
．．．．」

「ああそうだ。私の弟だ。何の因果か知らんがISを動かしてしま
ってな．．．．お陰でこっちはあいつの入学手続きでてんや
わんやだ。」

「でもだからって俺も使えるって訳じゃ．．．．」

確かにその織斑一夏はISを動かした様だが、それは織斑一夏に
何か特別な要因があったからであって、シンにそれがあるとは到底
思えない。なのに何故？

「無論それだけではない。お前がああMSのパイロットだからこそ
言っているんだ。」

「どづいことですか？」

千冬の言葉にまた疑問を覚えたシンだが、それ言い切る前に新し
い声加わった。

「織斑先生。少しいいですか？」

「む。何だ？」

先程からデステイニーの側のコントロールパネルで何かを操作していた教師の一人が千冬に声をかけた。

「このISのことですが、やはりプロテクトが固く解析が出来ません。」

その教師は現状を説明しながら、手に持っていた端末を千冬と真耶に見せる。

「解析も終わってないってことは搭乗者制限もですか？」

「はい。そうです。」

「むう……………」

千冬と真耶はそれぞれ難しい顔をします。話についてこれなくなってきたシンはとりあえず何の話か聞こうとした。

「えと、何の話ですか？」

「む、いや。お前に今話そうとしたことだ。」

「このISにはあるプロテクトがかかっていて、機体の解析ができないのです。」

「またそのプロテクトには搭乗者制限もあって、特定の人間にしか乗れない様になってるんです。」

千冬、その教師、真耶が順番にシンに説明していく。

「……………じゃあ俺がこいつを使えると思ったのは……………」

「ああ。推測だがこいつの元となったMSのパイロットのお前がこの機体を動かせる可能性が高い。」

「……………」

シンは再度ISデステイニーへ顔を向ける。その表情には様々な感情が混ざっていた。

アスランによって砕かれた自分の力。本来死んでいる筈の自分がこうして生きていて、一度砕かれた力が姿を変えて目の前にある。それは何を意味するのか。シンには漠然とだが、世界が自分に戦うことを望んでいるように思えた。

「……………俺に、戦えと言うのか？ デステイニー……………」

口からそんな言葉が言葉が漏れる。千冬達は怪訝な顔をするが、シンが気にすることなく、デステイニーへ一歩、一歩と足を進める。

「何の為に戦うのか、今の俺には分からない。」

デステイニーの一步手前でシンは足を止め、右手を伸ばす。

「けど、戦う為の理由が、俺が守りたいと思えるものがここにあるのなら……………」

伸ばした右手がデステイニーの装甲に触れる。

「俺は・・・・・・・・俺は戦う!!」

刹那、デステイニーとシンを緑色の光が覆い始める。

「こ、これは!?!」

「ISが・・・・・・・・男に反応してる・・・・・・・・。」
「嘘!?!」

周囲から教師たちの驚きの声上がるが、今のシンの耳には入ってこない。

―スキンバリア皮膜装甲展開―

―スラスタ推進機正常作動―

―ハイパーセンサー最適化―

次々とシンの頭に情報が流れ込む。今まで触れたことも無い知識、しかしまるでずっと昔からその知識を知っていた様な感覚がする。それがどれだけの時間流れてきたか、最後にシンにとって馴染み深い―デステイニーのOSの一部が流れてきた。

Gunnery

United

Nuclear -

Deterion

Advanced

Maneuver SYSTEM

そしてシンとデステイニーが光に包まれ、次にその姿が見えたときには.....

その四肢を鉄灰色の装甲で覆い

頭に四角いブロック状のパーツとV字アンテナ

アンロック・ユニット
非固定浮遊部位の鋭い形状の巨大な翼

そして胸部装甲中央にクリスタルパーツ、装甲の各部にクリアパーツがはめ込まれたIS

ーデステイニーを身にまとったシン・アスカがいた。

「.....これが.....IS.....」

腕部装甲のマニピュレーターを確かめるように開いたり閉じたり

するシン。その表情は幾らかの驚きと困惑が見えていた。一方側にいた教師たちは二人目のISを動かせる男の登場に呆然とするばかりであった。

少しばかり時間が経ち、その場を動かしたのは千冬であった。

「やはり動かしたか．．．．．アスカ!!」

「は、はい!」

初めてISを動かしたことで緊張しているのか、シンはややうわずった声で答えた。

「これよりそのISの起動テストを行う! まずは歩いてみる!」

「え!?! 織斑先生!?!」

「いきなりですか!?!」

彼女達の驚きも最もである。相手はISを動かせたといつてもISの知識もないズブの素人だ。いくらかの知識を教えるからでもないのでは、と思ってるのだろう。しかし千冬はそうは思っていないようだ。

「問題ない。こいつに知識は必要ない。感覚だけでも十分なぐらいだ。そうだろうか? アスカ?」

「は、はい。なんとなくですけど．．．．．」

「ということだ。山田先生は私と共に管制室へ。他の教師の方々はデータ収集と解析を。」

千冬は次々と教師たちに指示を出し、一部まだ不安に感じる様だが各々の役割を果たすべく持ち場に着いた。

『ではアスカ。まずはカタパルトへ歩いてみる。』

「りよ、了解。」

シンはわずかに緊張しながらもゆっくりと歩き始める。初めはヨロヨロと頼りないものだったが、数歩歩く内にもう慣れたかっかかりした歩き方になっていた。

カタパルトに到着したシンはデステイニーの両脚部をカタパルトにセットする。

「こちらシン・アスカ。カタパルトに到着しました。」

「分かりました。これよりアリーナ内でデステイニーの起動テストを行います。」

シンが管制室に通信を送ると真耶から返事が届く。気のせいかもしれないしっかりした声になっている。

「カタパルトから射出後、ホログラムのターゲットドローンを十五機出しますので、全て撃墜して下さい。なお、ターゲットドローンはランダムに回避運動と反撃行動をします。反撃の実体ダメージはありませんけど気をつけて下さい。」

「了解。」

真耶からの通信を聞いてからシンは射出時のGに備えて体を僅かに屈める。そしていつも言うあの言葉を放つ。

「シン・アスカ、デステイニー、行きます!!」

カタパルトがシンの体を押し出し、デステイニーを纏ったシンはISアリーナへ躍り出た。

初めてのISでの空中飛行だが、少しふらつきながらもMSの経験が活かしているのか、それ程ひどいものでは無かった。

しばらくアリーナの中を回って飛行感覚をつかみ始めたシンに麻耶から再び通信が入る。

『アスカ君。これよりドローンを出します。準備はいいですか？』

「あ、はい。大丈夫です。」

『ではドローンを出します。』

アリーナの所々にターゲットドローンが投影される。それを確認したシンはデステイニーの武装項目を表示させるが、あることに気づく。

(武器にビームソードとビーム砲がない!?!?!?どうということだよ!?)

ハイパーセンサーを使ってデステイニーの背面を見てみると本来あるはずのビームソード『アロンドایت』と高エネルギー長射程ビーム砲、そしてそれらを保持するための武装ラックと懸架アームがなく、金属のブロックの様なパーツがついてるだけであった。見れば表示されている武装も格納領域内のビームライフル、両肩のビームメラン『フラッシュエッジ』、それと非固定浮遊部位の基部に内蔵されている近接防御機関砲『CIWS』だけであった。

デステイニーはZGMF X-56S『インパルス』のコンセプトの『シルエツト換装による全領域対応MS』を発展させた『換装無しで全領域に対応した高機動MS』である。当然ISになってもそこは変わらないと思ったのだが……

——警告! ターゲットにロックオンされています。——

「!」

デステイニーからの警告にシンは慌てて回避運動をとる。次の瞬

管制室にいるもう一人の女性、千冬はシンの動きを冷静に見ていた。
そうしている内に残りのドローンは残り数機となる。

「さて．．．．山田先生。ここは私が引き受ける。整備済みの
が一機あつたはずだ。それを使うといい。」

「分かりました。すぐに準備します。」

真耶は千冬に応じて何かの準備に管制室を出る。残った千冬は黙
って映像に映るシンのデスクティニーを見ていた。

「さて．．．．．」

戦闘は次の局面に進もうとしていた。

「これでえ．．．．ラストオ!!!」

後ろのドローンを振り返り際の射撃で落としたシンはスラスタ
の出力を最大にし、一気に肉薄する。その勢いのままシンはフラッ
シユエッジを横一文字に叩き切る。

「ハッ．．．．ハッ．．．．ハッ．．．．」

初めてISを動かしたことによる緊張の為か、息が粗くなる。息
を整えようと深呼吸を繰り返していると、今度は千冬から通信が入
った。

『どうだ？ アスカ。そいつの調子は？』

「．．．．．少し機体の反応が鈍い。俺の動きにデステイニーが
ついてこれてない」

『問題ない。直にそのISが最適化をしてくれるでは次に模擬戦を
開始する。いいな？』

「はい！」

しばらくしてからシンが出てきたピットからカタパルトに押し出
されてきたIS—量産機のラファール・リヴァイブが発進した。
そのリヴァイブに乗っているのは．．．．．

「や、山田さん？」

リヴァイブに乗っていたのは真耶だった。いつものほんわかした
彼女を見てたシンにとって模擬戦の相手が真耶だったことに驚いて
しまった。

「あ、アスカ君。模擬戦の相手は私が行います。」

『山田先生は元代表候補生だ。舐めてかかると痛い目に会っぞ。』

軽く真耶は挨拶をし、千冬言葉にシンは気を引き締める。

『ではこれより模擬戦を開始する。始め！』

千冬言葉を皮切りに、シンと真耶が動き始める。まず先手を打
つたのは真耶だった。ラファール・リヴァイブに持たせたマシンガ
ンでシンに狙いを定め、引き金を引く。放たれた弾丸をシンに向か
って跳んでいく。シンはそれを最低限の動きでかわそうとするが．
．．．．．

ガガガガガッ！！

「うわっ！？」

やはりデステイニーの反応が遅れているのか、数発被弾してしま
う。

「くそ！」

「どうしました？ アスカ君？ まだまだですよ。」

思わず悪態をつくシンに真耶は挑発の言葉をかける。それで一瞬
頭に血が上ったのか

「なめるな！」

その言葉と同時にフラッシュエッジを抜き放ち、ソード形態で真耶
に襲いかかる。

「くうううう！」

「パワーならこっちが上だ！」

真耶は近接ブレードを展開して応戦するが、パワーが上のデステ
イニーによって強引に押し切られ弾き飛ばされる。

「うわっ！？」

「こいつを食らえ！！！」

弾き飛ばされた真耶は姿勢を整えようと一瞬動きが止まり、シン
はその隙を逃さなかった。

手に持ったフラッシュエッジを今度は投擲形態にすると、真耶に向けて、思い切り投げ飛ばす。

「えー!? 投擲武器!?!」

今までフラッシュエッジを非実体剣とばかり思っていた真耶は諸にフラッシュエッジの攻撃を受けてしまう。

「きゃああああ!?!?!」

フラッシュエッジが直撃した際に生じた爆煙と衝撃に真耶は悲鳴をあげる。

「これで終わりだ!」

一気に畳みかけようとシンはデステイニーをリヴァイブに肉薄しようとする。しかしそう上手くはいかないようだ。

「ま、まだです!」

真耶はそう言い放ち、マシンガンの代わりに今度はミサイルポッドを展開、デステイニーへ向け撃つ。

「その程度!」

シンは非固定浮遊部位のCIWSを展開し、ミサイルに向け弾幕を張る。

ドカアアアアアン!?!?!

激しい爆発と共にシンの視界は爆煙で塞がれる。ハイパーセンサーを使えば爆煙の目隠し等意味をなさないものだが、それでも一瞬反応が遅れる。そしてそれが真耶の狙いだった。

「そこ!!」

「!?!? いつの間にか!?!」

気がつけば真耶のラファール・リヴァイブはシンの後ろから接近し、射撃を加える。

ドカアアアン!!!!!!!!!!

「うわあああ!!!!」

シンは悲鳴をあげ、その隙をつき真耶がデステイニーを掴み取る。

「これはさっきのお返しです!!」

そのまま真耶はシンを投げ飛ばし、デステイニーに向け右手のマシガン、左手のミサイルポッドを一齐に撃ちまくった。それらはデステイニーに吸い込まれる様に直撃する。

ドカアアアアアアン!!!!!!!!!!

デステイニーの機影は爆煙に包まれる。

「や、やった!?!」

思わず真耶は声を上げるが

『油断するなよ、山田先生。』

千冬の通信が割り込む。

『まだアスカのデステイニーは……………』

煙が晴れそこにいたのは……………

『ファーストシフト一次移行を済ませていないからな。』

装いを新たにしたシン・アスカのデステイニーであった。

『ファーストシフト一次移行の終了を確認、ZGMF X-42S『デステイニー』再起動。』

デステイニーから送られる情報を確認したシンは一次移行を済ませたデステイニーの全身を見る。

鉄灰色の装甲は白灰色、青、赤の三色に染まり、より洗練された姿となる。背面部のブロックパーツは姿を変え、デステイニーの非固定浮遊部位のウイングスラスタを一回り縮んだスラスタとなっている。同時に胸部のクリスタルパーツと全身に埋まったクリアパーツには緑色の光が灯されていた。そしてシンの目の下には見る者によっては血涙を連想してしまいそうな赤いラインが引かれていた。

「これは……………」

呆然とした表情でデステイニーを見るシンだが、そこであることに気づく。

(違和感が消えてる?)

先程までであったシンとデステイニーの間にあった反応のズレが消えている。まるでシンとデステイニーが一つになったような感覚だ。

「そんな……初期設定だけであそこまで戦えたの?」

『そのようだな。全く次から次へと驚かせてくれる。』

真耶の驚きの声と千冬の通信越しの声を聞き流し、シンはデステイニーの武装項目を再度表示させる。一次移行したことにより武装には新たにビームソード『アロンドイト』、高エネルギー長射程ビーム砲、パルマ・フィオキーナ、ソリドウス・フルゴールビームシールドが追加される。

「武装が……これなら!」

シンはデステイニーにアロンドイトを展開させ、両手でその得物を構えると同時に非固定浮遊部位のウィングスラスタからヴオアチユール・リユミエールを稼働させ、そこから光の翼を放出する。

「ええ!?!」

光の翼を見た真耶は驚きの声を上げる。シンはそのまま凄まじい速度で一気に麻耶に接近する。

「11、11の…」

真耶はシンを止めようとマシンガンとミサイルをデステイニーに向けて撃つが、ヴォアチュール・リュミエールによる高機動に加え、ミラージユ・コロイドを応用した残像によって真耶の攻撃はシンにかすりもしない。

「あああああああ！！！！！」

シンはその勢いのままアロンドイトを横風に払う。

「きゃっ！」

真耶は悲鳴を上げ大きく体制を崩すが、シンの攻撃は止まらない。勢いを止めずに真耶の後ろに回り込むとデステイニーを反転させ、そのまま後ろから真耶のラファール・リヴァイブを再び横風に切りつける。

そしてそれが模擬戦の終幕でもあった。真耶のリヴァイブは切りつけられたままアリーナの地面に叩きつけられた。

『山田先生。大丈夫か？』

「は、はい。なんとか……………」

千冬が真耶に声をかけるとラファール・リヴァイブの衝突によってアリーナの地面にできたクレーターからボロボロになった麻耶が這い出てきた。

「ええと、大丈夫ですか？ 山田さん？」

そこでシンが空から降りてくる。思い切り真耶を地面に叩きつけてしまったことを気にしてか、若干心配げな顔になっている。

「ああ、大丈夫ですよ。アスカ君。心配しないでください。」
「そう、ですか。」

「はい。それより、リヴァイブをビットまで牽引してもらえますか？ さっきの背面からの攻撃で推進系統の調子が悪いんですけど．．．」

「．．．．．ホントにすみません．．．．．」

．．．．．こうしてなんと最後のシメの悪い感じで起動テストは終了したのであった。

「では、今日はここに泊まっていたいただきます。」

そう言っただけで真耶が連れていったのは今までの医務室とは違うIS学園教員寮の教員室であった。学生寮でもないのでは、という声もあつたが、まだ発表されていない世界で二人目の男性IS操縦者を生徒に見せるわけにもいかないのか、という処置になったのである。

「明日は戸籍の作成や入学の手続きの書類などやるのが沢山あるので今日はゆっくり休んで下さい。何かありましたら先程渡した携帯で私か織斑先生に言って下さい。」

「分かりました。ありがとうございます。山田さん。」
「違いますよ。」

「え？．．．．．ああ。すみません。山田先生）．．．．．」

模擬戦の後シンの処遇に関する話し合いが行われ、シン・アスカ

が希少な男性IS操縦者であること、そして異世界人であることを考慮した結果、シンは男性IS操縦者として身柄の保護と国際IS委員会で開発が進められている試作ISのデータ収集という名目でIS学園に入学することが決まったのである。

それではおやすみなさい、と真耶の言葉を最後に部屋のドアが閉まる。シンは真つ直ぐベッドに足を進めると、そのまま倒れ込む様に寝転ぶ。この1日で色々なことが起きたためか、すぐに眠気がシンに襲いかかる。

「IS か 」

シンは自分が新たに得た力の名前をつぶやいた。それと同時にこれからの自分のことを考えた。

道は示された。自分は少なくとも3年間はこのIS学園で生徒として過ごす。そこから先のことはまだ分からない。だから、探そう。自分が戦う理由となるものを、守りたいと思えるものを。

「俺に 見つけられるかな 守りたいものが 」

それを最後にシンは眠りについた。

そして時は流れ

IS学園入学式

序章は終わりを迎え

全ての物語が始まる。

生まれ変わりし運命の剣（後書き）

どうも。パクロスです。最近『ゼルダの伝説 時のオカリナ』のまさかの64版をやってるパクロスです。

いやあ、今回は色々詰め込みすぎて書くのが大変でした。

とりあえず、今回はISデステイニーの初御披露目の回でした。

まず一番に考えたのはデステイニーのIS化の過程作りです。あまりよくあるパターンの気がついたら自分の機体がISになっていたというのは個人的に好きじゃ無いんで、こういう形式を取ってみました。デステイニーのオリジナル設定で組み込まれた特殊パーツが発動、結果デステイニーが側にいたラファール・リヴァイブと融合してIS化という感じです。ちなみにこのオリジナル設定のクオリファイア因子ですけど、この後も出てきます。てかこの作品における重要ワードになります。

次にISデステイニーの設定ですけど、まず全体のシルエットとしてはMSの装甲をISアーマー風にしたらといった感じで考えて下さい。翼のウィングスラスタや武装の一部は非固定浮遊部位にしたり格納領域に収納してみました。あと頭部バルカンはそのままで頭の負担がやばいと思っただんで非固定浮遊部位に取り付けました。それとアロндаイトとビーム砲が格納領域にしまったことで空いた背面スペースにはスラスタを追加して機動性を上げてみました。ISと融合した訳ですからMSの良いところだけでなくISの利点も組み込まないと。てか他の方の作品読んできるとIS化したとはいっても、ISになったというよりただMSをISサイズに直しただけじゃないの、ていうのが妙に多い気が……。

で、シンのデステイニーでの戦闘描写ですけど、どうでしょう？ シンが弱いつて声が拳がりそうですけど、いくらMSではエース級とは言えどもMSとISとではそもそも畑違いですから。むしろ初

搭乗で山田先生倒してるのは凄いよ。そこはコーディネーターの適応力の高さでステイニーのスペックの高さからということだ。まあそういう感じですね。他に気になることがありましたら感想へどうぞ。

そんなこんなで次回はIS学園編本格始動！．．．．．と言いたいところですが、そろそろ学校の方で定期テストがあるので、しばらく更新が遅れると思います。何とか11月中に一話は投稿したいと思えますけどどうなるかは分かりませんね。まあ気長に待って下さい。

以上。失礼しました。では次回をお楽しみに。

入学、そして新たな出会いと波乱の幕開け（前書き）

お久しぶりです。完成したんで投稿します。

入学、そして新たな出会いと波乱の幕開け

桜咲く4月のこの時期、ここ日本においてこの時期は学校は入学式、会社は入社式と新しい年度が開ける時期と言える。また季節は春、暖かく穏やかな日差しと風を肌を感じ気持ちを新たに毎日を過ごせる時期でもある。

しかしここI S学園1年1組の教室には春という季節から連想できないような異様な緊迫感と特定の生徒へその他大勢の生徒から寄せられる好奇心の眼差しで充満していた。

「全員揃ってますねー。それじゃあ。SHRをはじめますよー。」

「.....」

1組の副担任である山田真耶が声をかけるがほぼ全員何の反応を示さない。わずかに反応を示す生徒もほんのわずかに顔を真耶に向ける程度といった有様である。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「.....」

真耶が説明するもののしかし、相も変わらず虚しく教室に響き渡り霧散するだけであった。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ここで生徒の自己紹介に入ったことでやっと生徒からリアクションが入る。ちなみにこうも生徒が真耶の言葉に反応しないのは別に入学早々昨今問題となっている生徒による教師いじめが起きているわけではない。

原因はこの教室にいる特定の生徒――このIS学園で二人だけの男子にはほぼ全員の意識と視線が集中しているからである。

その男子の一人、織斑一夏は周囲から浴びせられる視線の嵐ともう一人を除いて99%の生徒が女子というこの状況に早くも精神的に疲労していた。

(こ、これはキツイ！キツすぎる！)

そこで一夏は窓側の席に座る幼なじみの篠ノ之箒へ目を向けるが、途端に箒は目を逸らしてしまう。

八方ふさがりな状況に一夏は思わず溜め息を吐く。

(はあ．．．．．どうしてこんなことに．．．．．)

ちなみに一夏がIS学園に入学するまでの経緯だが、受験会場で道に迷い、偶々入った場所にあったISに触ったらISが反応したというなんとも偶然かつ間抜けなこと極まりないものであった。

(まあ、俺の他にも男がいてくれて良かった．．．．．一人でここにいられる自信がない．．．．．)

一夏が今度は壁際に目を向けるともう一人の男子でこことは異なる世界――C・Eからやってきた男、シン・アスカが座っていた。

国際IS委員会で開発中の男でも扱えるワードスーツのテストパイロットで、偶然研究用と解析用に持ち込まれていたISに触れたらISが反応し、二人目となったISを使える男――それが今のシンの肩書きである。なのでシンは国際IS委員会所属のIS操縦者ということになっている。ちなみにデステイニーは国際IS委員会で開発中のビーム兵器搭載型試作ISという扱いになっている。

ちなみにそのシンは今一夏同様周りから来る視線の嵐にいささか居心地悪そうにしていた。

(．．．．．誰かどうにかしてくれ、この居心地の悪さ．．．．．)

そうしている内にシンの番になっていた。

「つぎはアスカ君、自己紹介お願いします!」

「！ 分かりました。」

真耶に言われ、席を立つシン。途端に周りからの視線が一斉にシンに向けられた。思わず後ずさりしそうになる足をこらえる。

(と、とりあえず自己紹介だ……)

軽く咳払いで相槌を打ちシンは自己紹介を始める。

「えー、シン・アスカです。一年間宜しくお願いします。」

まずは軽く名前をいってみるが周りからの反応が全くない。何か不味いこと言ったかと思しき一瞬シンは慌てるが、ただ全員他にはないかと待っているだけだと気づき、自己紹介を続ける。

「あー、年は17で皆より2つ上だけどあまり気にしないで下さい。俺あんま気にしないんで。あとアスカって呼ばれるのあんま慣れてないから俺のことはシンって呼んで下さい。」

実力主義で年齢での上下関係がないザフトに所属していたシンはあまり同世代に敬語で話されるのに慣れていない。そのまま自己紹介を終わらそうとするが未だ周囲からの『他にないか』視線が続いている。

(いや、これ以上何話せばいいんだよ！)

シンは思わずそう言いたくなかったが、言っても代わりに今度はブーイングが飛んでくることだろう。どうしようかと考えたシンはふと思いついた手段にでた。

「あー、皆から何か質問ある？ 2つ位なら答えられるけど……」

「」

「……………」

途端

『ハイハイハイハイ!!!!!!』

「うお!?!」

先程まであれほど静かだった教室が質問の声で埋め尽くされる。思わずシンと一夏は耳を塞ぐ。

「好きな女の子っていますか!?!」

「女性のタイプは!?!」

「趣味は何かありますか!?!」

「Sですか!?! Mですか!?! アブノーマルなほうですか!?!」

「ちょ!?! 皆落ち着け!?! てか最後の何だよ!?!」

「み、皆さん落ち着いてくださーい!?!」

. 最後の質問はともかくシンに向けて一気に大量の質問が飛んできた。一瞬驚いてしまってもシンは一旦周りが落ち着いてから丁寧に答えていった。

「えーと、趣味はツーリングと せんぐらいです。好きな女の子は、まあいません。タイプとかも特にありません。あとSでもMでもアブノーマルでもないぞ。至ってノーマルだ。」

最後に、以上です! と言って半ば強引に自己紹介を終わらせる。正直これ以上この空気に耐えられそうにない。その後は比較的スムーズに進み、このクラスでもう一人の男子ー織斑一夏の番がきた。

「次は織斑君。宜しくお願いします。」

「 」

真耶がちょうど目の前に座る一夏に言うが、何故か一夏は反応しない。そのせいか先程よりも視線がずっと集まりだしている。

(何か考え事か?)

何の反応も示さない一夏を見てシンはふと思った。実際は先程から『何故こうなった?』と頭の中で無限ループして聞いていなかっただけであるが。

「織斑君。織斑一夏君!」

「はっ、はい!?!」

ついには真耶は身を乗り出して一夏に対して言い始める。一夏もやっと気づくがすでに遅し。周りからクスクスと笑い声が出てしまう。シンも思わず、あいつ大丈夫か、と思い始めてしまう。

「あ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる? 怒ってるかな? ゴメンね、ゴメンね! でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね! 自己紹介してくれるかな? だ、ダメかな?」

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っっていうか自己紹介しますから。先生落ち着いて下さい。」

「ほ、本当? 本当ですか? 本当ですね? や、約束ですよ。絶対ですよ!」

今まで何の反応も示さなかった一夏に対して何か落ち度があったのかと思っただか、真耶がペコペコと頭を下げ始める。その姿に教師らしさはまるで見当たらない。流石に居たたまれなくなったか一夏が止めるが今度はガバツと顔を上げ一夏の手を取り熱心煮詰めより出し始める。その姿に以下略。他の生徒よりも前から真耶のことを知ってるシンにしても正直真耶が教師なのかたまに本気で疑問に思ってしまうぐらいである。

そのような何とも間の抜けたやりとりの後、一夏が席を立ち自己紹介を始めようとするが……

(うつ、さつきより視線が……)

シンの自己紹介が落第点だったことと真耶とのやり取りのせいか、先程よりも視線が強く感じてしまう。とにかく何か喋らなければ、と思い自己紹介を始める。

「えー……えっと、織斑一夏です。宜しくお願いします。」
「……」

沈黙が続く。周りから『他に無いの?』とか『これで終わりなの?』とでも言わんばかりの視線が降り注ぐ。何か喋らなければ、と一夏は考えるが、如何せん周りからの視線がキツく考える余裕も無い。シンと同じ感じで自己紹介すれば良いではないかと思う方もいるだろうが、先程の無限ループでシンの自己紹介を全く聞いていなかった様である。

長い沈黙の後、一夏は息を深く吸い、吐き出す。何か話すのでは、と全員思わず身構えるが……

「以上です!」

名前だけ言って強引に終了させるといふ荒技に出始めた。何か話すのでは、と思っていた生徒達は面白いぐらいにズルツとこけてしまふ。

「あ、あれ?何かまずかった?」

その様子を見て思わず一夏は口に出すが、誰が見てもその終わらせ方は不味いだろうとしか言いようがない。おそらく一夏を除く全員が思ったことだろう。

そんな一夏の後ろから近づくと人影が一つ。

バアアアアアアン!!!!!!!!!!

「いつ!?!」

(今の音ってまさか……………)

突如後頭部に襲いかかる衝撃と痛みにうずくまる一夏。そして今教室に鳴り響いた音に聞き覚えのあるシン。一夏の後ろにいる人物に目を向けると……………

「全く、まともな自己紹介もできんのか、お前は。」

「げえ!?! 関羽!?!」

阿修……………一夏の姉にしてこのクラスの担任である織斑千冬がいた。ちなみにどこぞのハム仮面のような変態発言はしないので御安心を。

(何故に関羽?)

再び一夏を除く全員が思った瞬間であった。

バアアアアアアン!!!!!!!!!!

そして再び鳴り響く炸裂音。今の音を出席簿で出しているのだから恐ろしいものである。近くの女子を見れば『うわ……………』というような顔をしている。

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者。」

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか?」

「ん? ああ、山田先生。すまないな。クラスへの挨拶を押しつけてな。」

「い、いえ。副担任ですから。これぐらいは……………」

再びうずくまる一夏をよそに話を進める千冬と真耶。そして生徒に向き合つと千冬は話し始める。

「諸君。私がこのクラスの担任を勤めることとなった織斑千冬だ。貴様ら新人を一年で使い物になるIS操縦者にするのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛え抜くことだ。逆らつてもいいが、私の言うことは聞け。いいな。」

これ以上無いほどの暴力発言。アカデミーの教官の台詞まんまだな、とシンは思った。まあ実際教官をやったことがあるわけであるが……。

しかしアカデミーの教官と違い返つてきたのは困惑や反感の台詞ではなく黄色い歓声であった。

「キヤーーーーーー!!! 千冬様!!! 本物の千冬様よ!!!」

「ずっとファンでした!!!」

「私お姉様に憧れてこの学園に来ました!!! 北九州から!!!」

先程のシンへの質問の時と同様——あるいはそれ以上だろう——生徒の奇声に再び耳を塞ぐシン。ちなみに一夏は未だにうずくまつたままだ。どれぐらい強く叩いたのだ?

「……はあ。毎年よくこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か? 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか? 迷惑な話だ。」

そんなクラスの様子を見て千冬はかなり鬱陶しそうな顔をする。教師が大っぴらにそんな態度でいいのだろうか? と再びシンは思

ってしまっ。

しかしこのクラスには問題ないようだ。

「キヤーーーーーー!!!!!! お姉様!!! もっと叱って!!! 罵
って!!!」

「でも時には優しくして!!!」

「そしてつけあがらないように躡をして〜!!!」

いや待て。さっきの質問といいこれといい何なんだよ。このクラス
の今後が本気で心配になってきたシンである。そんなシンをよそ
に千冬は一夏と目を合わせる。

「で、もう一度言うが、まともな挨拶一つ出来んのか? お前は。」

「いや、千冬姉、俺は〜」

思わず言い返そうと一夏はするが……………

バアアアアアアン!!!!!!

「織斑先生と呼べ、馬鹿者。」

「……………はい、織斑先生。」

あっさり黙殺された。これでよく今までPTAとかから訴えられ
なかったものだとしんは思った。しかしこのやり取りで一夏と千冬
の関係が何となく分かったらしく、あちらこちらからささやき声
が聞こえてくる。

「え……………? じゃあ、織斑君ってあの千冬様の弟……………
?」

「それじゃあ、世界で二人だけの男でISが使えるってのも……………

「じゃあアスカ君は？ 彼も家族にIS操縦者でも……？」
「でもアスカって名字の有名IS操縦者なんて聞いたこと無いよ？」

段々小声での会話の対象が一夏からシンに関する話になり始めて千冬も真耶もマズい思い始めた。一夏はともかく異世界から来たシンの周辺を下手に感探られると大分こじれた話になってくる。

MSステイニーの証拠映像とISステイニーに使われてる技術系統の違いなどからシン・アスカは異世界人だと国際IS委員会も一応了承しているが、未だそのこと不信感を抱いてる人間も多い。異世界という突拍子の無い話だからしょうがないと言えるでしょうがないだろう。そんな弱い立場にいるシンの足場はふとしたこと容易く崩れていくものである。とはいえ、一介の学生が探りを入れてもたかがしれている。それにこのことを知っている国際IS委員会の人間は上層部の何人かとISステイニー開発チーム（開発という言い方は正しくないが便宜上その名になっている）スタッフぐらいだ。そこまで気にすることはないだろう。

丁度いいタイミングでチャイムが鳴り、千冬は最後の言葉で締めくくる。

「静かに！ さて、SHRは終了だ。諸君らにはこれから半月でISの基礎知識を覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で叩き込め。いいか、いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ。」

大分理不尽極まりない言葉でSHRを締めくくる。世の中には鬼教官という言葉があるが千冬に限って言えばそれは当てはまりそうにない。鬼教官どころか鬼そのものだ。今までの発言からシンはそう思ってしまう。

『はい！！！！！』

「うむ、宜しい。それからアスカ。」

「はい？」

何事かとシンは目を向けると……………

バアアアアアアン！！！！！！

「お前はいつまで私に対して失礼なことを考えているつもりだ。」

「……………すいませんでした。以後気をつけます。」

どうやら筒抜けのようであった。

今後の生活に不安しか感じないシンであった。

時は変わって今は休み時間。先程一時間目のIS基礎理論授業が終わったばかりだ。しかしながら先程から続く女子からの視線は消える気配が無い。寧ろ休み時間になったことで他のクラスや2年生3年生が押し掛けてきたことでより強く感じてしまう。何とかこの視線に耐えながら、シンは次の授業の準備にかかる。するとシンの方にもう一人の男子――織斑一夏が近づく。

「よ、よお……………大丈夫か？」

「……………いや、俺は大丈夫だがお前の方は大丈夫かよ？」

そういうシンは改めて一夏を見てみると、精神的ダメージ（女子からの視線）と肉体的ダメージ（千冬の出席簿）のせいか全体的にすすけて見える。今にも魂が抜けてしまいそうな感じである。とり

あえずいざとなったら鋼の鎧でも用意しようと考えたシンであった。

「ま、まあ、何とか．．．．．。とりあえず、同じ男子ってことだし仲良くしようぜ。えっと．．．．．。」

何とか復活し話をするが、名前が分からないらしく口ごもってしまふ。どうやらシンの自己紹介を聞いていなかった様である。

「．．．．．シン・アスカだ。」

「あ、悪い。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ。そう言えば年が上だけど．．．．．。」

「いや、別にタメでいいよ。そういうの関係無い所で生活してたし。」

「そうか。じゃ、改めて宜しく。シン。」

一夏は元気を取り戻したか先程よりもしっかりしたこえになる。

そして右手を出す。握手のつもりだろう。しかしシンはそれが何なのか分からない様である。

「？ 握手なんだけど．．．．．。」

「．．．．．ああ、ゴメン。最近そういうのすっかり忘れちゃう生活だったから。」

そうシンが言い握手を交わす。その瞬間周りから『これって男の青春ってやつ!？ それとも．．．．．グフフ』織斑君が攻めでシン君が受けかしら? それとも逆パターン? 『一夏×シン．．．

．．．いいわ! すっごくイイ!』などと何やら怪しげな発言が聞こえたが聞かなかったことにする。

「あ、そうなのか? 大変だな、お前も。」

「まあ、な。」

そのまま話が続くかと思っただら、横から別の声が割り込んできた。

「……………ちよつといいか？」

「え？ ………………箒？」

「知り合いか？」

「ああ。俺の幼なじみ。」

目の前の少女――篠ノ之箒はアスカ、とシンに声をかける。

「一夏を借りるがいいか？」

「ああ、いいぞ。あと俺のことはシンで頼む、篠ノ之。」

「そうか。なら私のことも箒で頼む。名字の方は……………その……………あまり好きではないのでな。」

「……………？ 分かった。」

名前の話で一瞬奇妙な違和感を感じたが、それがなんなのか上手く言葉に出来ない。そのまますまん、と箒は一言言ってから一夏を連れてどこかに行ってしまった。再び一人になった途端、周囲からの視線が一斉に集中しだす。

(勘弁してくれよホント……………)

ルナマリアと付き合っていたので女性に対していくらか耐性があるとはいえ、四方八方を女子に囲まれるなんて一度も経験したことがない。今の状況に内心げんがりしているとまた別の女子から随分のんきな声をかけられた。

「やーやー、アッスーアッスー」

「あ、アッスー？」

妙な呼び方をするその女子を見てみれば、袖から手がでていないダボツとした制服を着ていていかにも『眠いです!』と言わんばかりの表情の女子であった。確か名前は……………

「布仏本音だぞー。アッスー。」

「ああ、悪い。てかアッスーって何だ？」

「んー？アスカだからアッスーだよー。アースのほうが良かったー？」

「止める。俺はゴキジェットじゃねえぞ。」

ゴキブリ退治に使われてたまるか、と言わんばかりに即座に却下する。

「あははー、ゴメンゴメン。それでアッスー、質問んだけどさー……………」

大して悪びれた様子のない本音がシンに質問しようとするがちょうど始業のチャイムが鳴りだす。

「あー、もう時間だー。それじゃあねー、アッスー。」

「あ、ああ。」

結局何しに来たんだというような感じで本音との会話は終わった。ちなみに一夏と篤は授業に間に合わず千冬からのありがたい出席簿アタックを貰ったそう。

「ーであるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証

が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられー」

普段はそうは見えなくても、やはりIS学園の教師か、真耶がスラスラとISの授業を進めていく。それに周りが聞き逃さぬ様にし、ノートに写す。それはシンも同じである。コーディネーターがナチユラルより優れているのはより多くの知識を得られる頭脳、より強靱な力を得られる肉体ということであり、そこに努力の二文字がなければコーディネーターもなと変わらないものである。とは言え、授業でやってることは基本的に全員ついてきているようである。約1名ー織斑一夏はそうではないようだが。先程から何度も教科書をめくってはその度に頭を悩ましているようである。

「織斑君、何か分からないところがありますか？」

運が悪いというか何というか、真耶が一夏にピンポイントで名指ししました。

「あ、えつと……」

「分からないところがあつたら聞いて下さいね。何せ私は先生ですから!」

そう真耶がいいえへんとも言いそうな表情になる。今まで教師らしくなかったところをここで一気に挽回しがいいところだろう。

やがて何か吹っ切れたか、一夏か思い切って質問する。

「先生!」

「はい、織斑君!」

しかし一夏の口から出たのは真耶の予想を遙か彼方をいくものであ

った。

「ほとんど分かりません！」

一瞬教室凍りついた様な気がした。少なくとも体感温度は数度下がった様に感じたと後にシンは言う。

「え．．．．．？ぜ、全部ですか？」

まさか全く分からないとくるとは思わなかったのだろう。先程まで優しい笑顔の真耶の表情が困惑のものとなる。

「え、えつと．．．．．織斑君以外で今の段階で分からないって
いう人はどれくらいいますか？」

「．．．．．」

真耶が拳手を促すも誰一人手を上げようとしない。シンもすでに予習済みなので特に問題ない。どうやらこの中で全く分からない人間は一夏だけのようだ。

(てかあの参考書読んだのか？ アイツ．．．．．)
千冬もシンと同じことを考えたらしい。一夏に問いかける。

「．．．．．織斑、入学前の参考書は読んだのか？」

「えつと．．．．．あの分厚い奴ですか？」

「そうだ。必読と書いてあった筈だが？」

しばらく一夏は何かを思い出す様な素振りをした後に答えた。

「古い電話帳と間違えて捨てました。」

バアアアアアン!!!!!!

やっぱりというかなんというか、例のごとく千冬のありがたい出席簿アタックを頂戴した一夏であった。ちなみに今のやり方でシンの一夏に対する評価が大分変動した。

「はあ……………必読の字が読めんのか、お前は。」

「うう……………すいません。」

「後で差発行してやるから一週間で覚える。いいな!」

「いや、一週間である量は「やれと言っている」……………了解しました。」

これに関しては自業自得としじや言えないだろう。あえなく沈没した一夏をおいて千冬が全員に聞こえる様に言う。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力とこの世界(……………)における過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起きる。そうしない為の基礎知識と訓練だ。理解できなくても覚える。そして守れ。規則とはそういうものだ。」

シンは心の中でその言葉に同意する。ISにしるMSにしる兵器としての一面を持つ以上それを扱うのにはそういったものは必要だ。千冬は事故と言ったが、そこには確実に『死』も含まれている。この世界に来るまでそれが重要となる世界——戦場を駆けていたシンには余計その言葉に実感を抱く。

——強すぎる力はまた争いを呼ぶ!——

ふとあの女——アスハが言ったことを思い出す。今なら彼女が言ったことが理解できる。力は力、使い方を誤れば多くの災いをもた

らす。しかしそれは同時に今のシンを苦しめる元となっている。もしそうなら俺が今までやってきたことは何だったのだろうか？ それは戦争のない些細な問題こそあれ平和なこの世界に来て、思い始めてきた疑問だ。

「……………貴様、『自分は望んでここにいる訳ではない』と思っ
っているな？」

唐突に千冬が一夏に言い放つ。その言葉に一瞬一夏がビクツとする。その反応からしてどうやら凶星のようだ。しかしこの人は何故こうも人の考えていることが読めるんだろうか？

「望む望まざるに関わらず、人は集団の中で生きていかなければならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな。」

千冬のいうことは辛辣だが同時に事実でもある。一夏も腹をくくつたのか、先程よりも覚悟を決めた様な表情になる。それに満足したか、次に千冬はシンに言った。

「アスカ、同じ男子だ。こいつにISのことを教えてやれ。」

「え？ 俺ですか？ 先生が教えた方が「私の判断に文句でもあるのか？」……………いえ、ありません。」

本当は言いたいことがあるのだが、向こうは聞かないだろうし、返答はどうせ出席簿だ。既に千冬に逆らうのを諦めているシンであった。

「よろしい。では山田先生、授業の続きを。」

「は、はい…」

千冬に急かされ真耶は授業を再開する。その後は一夏が相変わらず何も分らない以外は順調に進んでいくのであった。

「しかし、参考書を電話帳と間違えるか？ 普通？」
「う、そうなんだけどもあ……………」

二時間目の授業が終わり再び休み時間、シンは教科書と参考書片手に一夏の席に行きとりあえず最低限のことを教えていた。

「でも千冬姉も無茶言うよ。あれ一週間で覚えろって……………」
「ずっと前に渡されてるのに捨てちまうお前が悪いんだろ。」
「……………」

あえなく撃沈される一夏。そのままISの基礎的な単語やら用語やらを教えていると、また別の声がシン達に割り込んできた。

「ちよつとよろしくて？」
「へ？」
「ああ？」

突然声をかけられ、一夏は間抜けな声を、シンはなんかチンピラみたいな声を出す。声の主は金髪縦ロールが特徴的なイギリス系の女子だった。

（確かイギリス代表候補生の……………セシリア・オルコットだったっけか？）

シンは先程の自己紹介の時の記憶を掘り起こし何とか思い出す。――

夏の方はそもそも自分の姉がIS学園（いす）で働いてたことに驚いてその後の自己紹介を聞いていなかったようだ。

「聞いていますの？ お返事は？」

セシリアは再びシン達に対して言う。その声にはいくらか男に対する侮蔑が含まれているように感じられる。

（ああ、またこの手の女か．．．．．）

セシリアの態度を見て、シンは内心うんざりする。この世界に来て約1ヶ月、その間に何度か街などに出てその時何度か見かけた男を顎であしらう女性。大部分の女性は男の社会的地位を認めているが、それでもやはりそういう女というのはいたりするものである。大方、このセシリア・オルコットもその典型的なものであるう。

「あ、ああ。聞いてるけど．．．．．どういう用件だ？」

一夏はごく普通に返事をするが、セシリアは一夏の返答を聞いて驚きあきれられる様な声を出す。

「まあ！ なんですの！ そのお返事！ わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

そのセシリアの発言に段々イラつきを感じ出すシン。つつい口を出してしまう。

「はん！ あんたみたいな高飛車女に話しかけられて光栄だなんて言うなら世も末だね！」

「な、なんですって!？」

「お、おい！ 二人とも落ち着けて！」

急に険悪な雰囲気を出し始める二人に一夏は慌てて止めに入る。

「ふん！」

「はあ……ってかゴメン、俺、君のこと誰か知らないし。」

二人が落ち着いたところで言った一夏の不用意な一言でまたセシリアが噛みつきだす。

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試出席のこのわたくしを！？」

よくもまあここまで尊大な言い方ができるもんだとシンは思った。今回は口に出していない。とここで一夏がある疑問を口にする。

「なあシン、代表候補生ってなんだ？」

……つくづくこの男、皆の予想もつかないようなことを口にするようである。今の一言で自己紹介の時同様話を聞いていたクラスメイト全員がずっこける。

「あ、あ、あ……」

「あ『？』」

「あなた、本気でおっしゃってますの？」

「おう、知らん。」

「一夏……お前のその頭のネジの抜けっぷりにはホント感心させられるよ……」

「え？ いや、そんなこと言われても……」

『誉めてねえよ！！！』

場違いな感じで照れ出す一夏に思わず全員からの突っ込みが入る。この男、皆の予想も以下略。セシリアはセシリアで何やらブツブツ言い始めている。

「で、代表候補生って?」

「代表候補生というのは「国家代表IS操縦者、その候補生ってことだ」わ、わたくしの台詞を!??」

セシリアが説明しようとしたところをシンが割り込む。セシリアがゴチャゴチャ言うが無視する。

「ふーん、要はエリートってことか?」

「そう! エリートなのですわ!」

一夏のエリートという言葉に反応してかセシリアが今度は得意げな顔になる。

「本来なたたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける?」

「そうか。それはラッキーだ。」

「そうだなー、こんな奴と一緒にのクラスだなんて俺は幸せ者だなー!」

一夏は凄さが理解できたか怪しい口調で答え、シンに限っては投げやり・棒読み口調で返事をする。一夏はともかくシンの方は明らかに馬鹿にしたような口調だ。

「……………馬鹿にしていますの?」

「さ〜な〜」

馬鹿にしてるのは間違いないだろう。

「ふん！ まあISのことで分からないことがあれば、泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよ〜くつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから。」

「いや、ISのことはシンに教えて貰うから別にいいよ。」

「何ですつて」ところで入試つてあれか？ IS動かして戦つやつ？」？ ええ、そうですねよ。」

「それなら俺も倒したぞ、教官？」

「な！？」

一夏の言葉で今度は驚愕の表情になるセシリア。コロコロ表情が変わる奴だ。しかし、一夏が教官を倒したとは……………。シンは内心一夏に感心するが、実際は教官が自爆しただけだったりするのだが。そおこで驚きから復活したセシリアは今度はシンをキツと睨みつける。

「あ、あなたはど〜なのですか！？」

「あ？ 俺か？」

セシリアに詰め寄られシンは記憶をの糸を探り寄せる。この世界に来てやった山田先生との模擬戦、あれが確か入試も兼ねてるって入学手続きが終わった後に山田先生が言ってたから……………

「俺も倒したな。」

「あなたも！？ わたくしだけと聞きましたが……………」

「女子ではってオチじゃないのか？」

その瞬間『ピシッ』という嫌な音と共にセシリアの動きがフリーズする。どうやらこの一夏^{バカ}、また余計な地雷をふんだようである。

「っ、つまり、わたくしだけではないと……」
「いや、知らないけど。」

そう言った途端一夏に詰め寄るセシリア。鼻息も若干荒くなっており、先程の自信満々な雰囲気などどこかに消えてなくなったかのようだ。

「あなた！ あなたも教官を倒したというの!？」

「だからそう言ってるんだろ。」

「お黙り!! どうなのですか!!」

「えーと、落ち着けよ。な？」

「落ち着け!？ これが落ち着いていられー」

セシリアがさらに追い討ちの言葉をかけようとしたところでいいタイミングで始業のチャイムが鳴る。

「っ！ また後で来ますわ！ 逃げないことね！」

最後に捨て台詞を吐いてセシリアは自分の席につく。取り残されたシンと一夏はただ呆然とするしかなかった。

「………一体なんだったんだ？」

「さあな………。」

とりあえず厄介事が増えたのだけは確かなようだ。

「それではこの時間は実践で使用する各種武装備の特性について説明する。」

三時間目の授業、この時間は一、二時間目の授業と違い、千冬が教壇に立っている。余程重要なことらしく、後ろを振り向けば真耶がメモをとる準備をしている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな。」

そこでふと思い出した様に千冬が言う。ちなみに例のごとく一夏はよく理解できていない様だ。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、早い話がクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで。」

クラス代表について千冬がそう説明する。とはいえ、どういつても面倒な仕事に変わりはない。当然手を上げる生徒は誰もいない。自薦を除いてだが。

「はい！ 織斑君を推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

「じゃあ私はシン君を推薦します！」

「私もシン君を！」

「お、おい!？」

いきなり自分を推薦されシンは思わず焦る。一方の一夏は自分が推薦されたことにまだ気づいていない相変わらずの一夏だった。

「では候補者は織斑一夏とシン・アスカ……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ。」

「お、俺！？」

そこでやっと気づいたか、一夏が慌てて立ち上がる。

「織斑。席に着け、邪魔。さて、他にはいないのか？ いないのなら織斑かアスカのどちらかになるぞ。」

「ちょ、ちょっと待った！ 俺はそんなのやらなー」

「待つて下さい！ 納得がいきませんわ！」

思わず反論しようとした先にセシリアが割り込んできた。

「このような選出など認められません！ 大体、男がクラス代表者だなんていい恥曝しですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

セシリアの台詞はまだ続く。それはシンと一夏の怒りのボルテージを上げていく。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります。わたくしはこのような島国までES技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

セシリアの罵詈雑言に今度はクラスの日本人生徒がムツとする。

自分達の住む日本を馬鹿にされたから当然だろう。そもそもそれから早く自薦でもすればいい話だろう。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い屈辱でー」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ。」

「一夏？」

最初に口火を切つたのは意外にも一夏であった。シンも言おうとしたが、一夏に先を越された様だ。

「なっ．．．．あ、あなたねえ、わたくしの祖国を侮辱しますの!？」

「先に侮辱したのはどっちなんだよ！」

一夏の言葉にセシリアは怒りを露わにするが、間をおかずシンが続けて言う。

「大体、そんなに俺たちがクラス代表なのに文句があるんなら、さつさと自薦すりゃ良い話だろ。一々相手に文句言わなきゃ気が済まないのかよ！ あんたは!！」

「なんですつて!？」

「ふん、こんな性格の悪い女が良く代表候補生になれたもんだな！こんなじゃイギリスもホントに大したことないようだな！」

次々にくるシンの台詞にセシリアも我慢の限界が来たか、シンにだって言うてはならないことを言ってしまった。

「ふん！ そういうあなたこそ、先程と言い今と言い低俗なことし

わー！
「

それにシンが思わずぞっとする程凄みのある声で返す。

「
いいだろっ

血祭りに上げてやる……！……！……！」

入学、そして新たな出会いと波乱の幕開け（後書き）

どうも。パクロスです。ニコ動の「Call Of Duty 4 テクテク従軍記」ってシリーズにはまってるパクロスです。

CODって見てて思ったんですけど空耳ってか、聞き間違いがすごいですねー。敵兵ロシア語とかで話してるのに日本語にしか聞こえないと（笑）。

まあそれはともかく、お久しぶりです。試験が終わったのは今月の2日でそこから執筆再開で少しブランクがあったのと、オリジナルのガンダム作品の構想練りとかで一週間程かかってしまいました。どうもすいません。そんななんでどこかミスがあったり、こうした方がいいといういけんが有りましたら宜しく願います。

今回は入学からセシリアの決闘宣言まででした。正直ちょっと前で切ってもよかったかと思っただんですけど、最後の壊れシンを書きたかったんでここまで延ばし、さらに肉付けとかで気がついたら前回は余裕で超える一万五千字ということに……。書くのが大変でした。

で、ブチ切れシンですがいかがでしょうか？本編の方でシンって家族のこといわれで切れたことは無かったですけど、まず周りが直接家族のことで何か言った訳ではないのでこれはありかなあと思いました。あとセシリアにはシンにフラグが建ちました。血祭りフラグが。セシリア戦ではすごいことになるようなのでお待ちしてて下さい。

あとこの世界におけるシンの立場の話がありましたけど、あんな感

じでいいかなと思いました。そもそも異世界人ですっていつて信じ
る人ってそういないと思いますし。国際ISS委員会所属にしたのは、
その方が融通効くかなと思ったのと、国際ISS委員会だって試作I
Sの一機ぐらいつくってもおかしくはないから、下手にどこかの所
属にするよりいいかなと思いました。

まあこんな「おいおい、こんなんで大丈夫かよ」と地雷臭満載なこ
の作品ですえど、これからも宜しくお願いします。

次回はいつになるか分かりませんが、楽しみにお待ち下さい。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4547y/>

IS インフィニット・ストラトス ~折れた運命の剣の真の戦い~

2011年12月8日00時47分発行